http://www.edu.pref.kagoshima.jp/　（通巻第２１０７号）

指導資料　国　語　第156号

鹿児島県総合教育センター
令和４年４月発行

対象校種　小学校　中学校　高等学校　義務教育学校　特別支援学校

国語科授業における ICT 活用の考え方

― SAMR モデル分類で考える第一歩 ―

GIGA スクール構想で，各学校では ICT を活用した授業が急激に増加している。しかし，ややもすると，教師がただ ICT 機器を使っただけ，子供に使わせただけの授業を散見する。そこで，国語科授業における効果的な ICT 活用の実践例を踏まえてその考え方を提案する。

１　はじめに

「GIGA スクール構想」（2019）による取組がスタートした。さらに，中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～」（2021）では，ICT は学校教育において基盤的なツールとして必要不可欠なものであり，これまでの実践と最適に組み合わせて有効に活用するという姿勢で臨むべきであるということが示された。これらを受け，国語科の授業での ICT 活用が加速化している。しかし，ICT 活用の最初の一歩を踏み出すことに困難さを感じる先生方も少なくないと考える。

そこで，本資料では授業実践の紹介を通して，国語科授業における ICT 活用の考え方について説明していく。

２　基本的な考え方

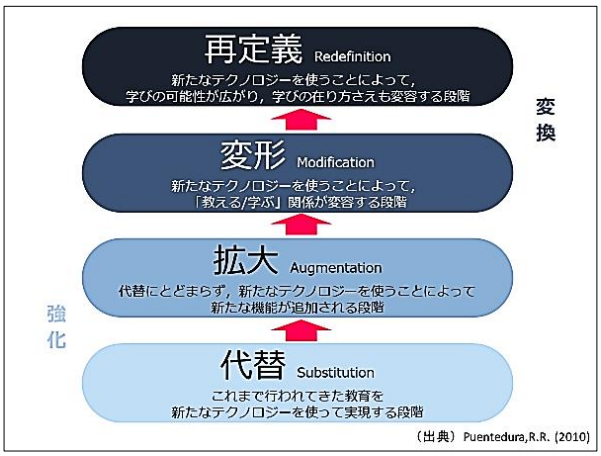
⑴　「目的」と「手段」の明確化

国語科授業で ICT を活用する際の重要な考え方は，国語科の目標を達成することが「目的」であり，ICT を活用することは「手段」の一つであるということである。しかし，「目的」と「手段」が逆転している授業が少なくない。このような場合，ICT 機器の操作をしたが国語の力を身に付けたという実感が伴わない授業になってしまい，いわゆる「活動あって学びなし」の状態に陥っていると言える。そのため，教師は授業構想の段階で，子供たちにどのような力を身に付けさせるのかという「目的」と，ICT を含めてどのような「手段」が効果的に目的に迫ることができるかを，これまで以上に熟考する必要があると言える。

⑵　活用例の整理

ICT の活用方法は多種多様であり，それらの中から目的達成のための最適な活用方法を見付け出すことは難しい。そのため，活用方法を整理しておくことで，目的に応じた活用方法を引き出しやすくなる。そこで，本資料

資料１　SAMR モデル



では，ICT が授業や学習者へ与える影響を測る段階を表すモデルであり，Ruben(2010)によって考案され，三井一希（2014）が意訳している「SAMR（セイマー）モデル」で整理して考えることにする（**資料１**）。

本モデルは，４段階で分類される。上の段階に行くほど，活用の主体が教師から学習者に移行していく。特に，３段階を超えると主体が逆転する。そのため，段階が進めば進むほど，学習者が文房具として ICT を主体的に活用していると言える。上位の活用段階を目指していきたい。

３　SAMR モデル分類による実践例

⑴　代替（Substitution）

これまで行われてきた教育を新たなテクノロジーを使って実現する段階である。活用の主体は「教師」であり，教師が「学習者」に対して効果的に指導することが目的となる。

（例）
- 電子黒板で大きく映す。
- 実物投影機でノートを大きく映す。
- デジタル教科書で叙述を確認する。
- カメラで撮影し，提示・保存する。
- フラッシュカードを提示する。
- 学習ログを提示する。

■ 国語科におけるノート指導（１年）

国語ノートへの書き方を具体的に指導するため，実物投影機で教師のノートを大きく見せた。　**松山教諭（山下小）の実践**

■ 班で意見をまとめよう（３年）

班ごとの読み聞かせの動画をタブレット型端末で共有した。子供のペースで互いの発表を見て，自分の読み聞かせに生かせるようにした。このように，「書くこと」だけでなく，「話すこと・聞くこと」の学習でも活用できる。

江口教諭（山下小）の実践

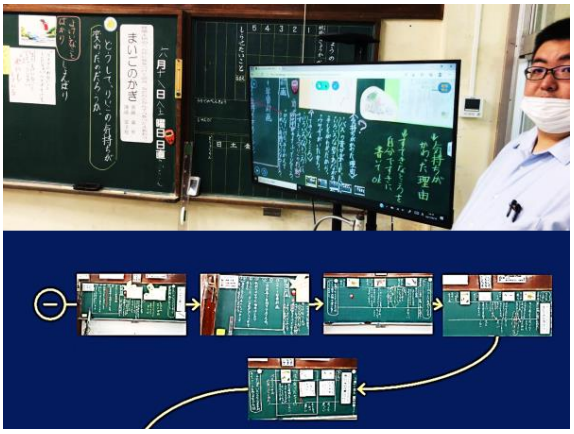
このように，この段階での ICT 活用の授業は，提示型を中心とする授業であると言える。これまでに多くの実践があり，一度はしたことのある活用方法ではないだろうか。

⑵　「拡大」（Augmentation）

代替にとどまらず，新たなテクノロジーを使うことによって新たな機能が追加される段階である。活用の主体は「教師」であり，教師が「学習者」に対して効果的に指導することが目的となる。

（例）
- 共有データに個人で書き込ませる。
- 個々のタブレット型端末の画面を巡回表示する。
- 写真や動画等を挿入したプレゼンテーションソフトを活用する。1)
- ロイロノート・スクールなどのアプリケーションを活用する。
- リアルタイムにクラウド上のホワイトボードに書き込みをしながら説明する。

■ 登場人物の変化に気を付けて読み，感想を書こう「まいごのかぎ」（３年）



授業終了後に板書を撮影し，その板書写真を活用している。大型ディスプレイを用いて，前時の学習を振り返る際に活用できるようにしていた（上段）。また，撮影した板書写真を子供一人一人のタブレット型端末へ送信・共有し，アプリケーション上で学習の軌跡を捉えられるようにしていた（下段）。　**森教諭（川床小）の実践**

1）ロイロノート・スクールとは，株式会社 LoiLo が提供する授業支援アプリケーションソフトウェアである。

■ 自分と比べて，感想を書こう「わたしはおねえさん」（２年）

自分と比べながら主人公の言動を読み取るために，上学年の子供との交流があった学校行事等の写真を個々のタブレット型端末で共有し，お世話になった時の気持ちを想起しやすいようにしていた。

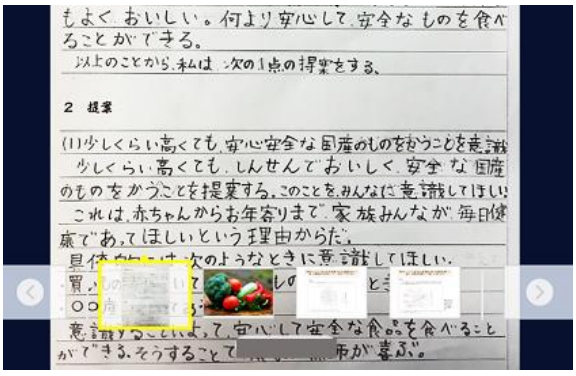
藤武教諭（山下小）の実践

このように，この段階での ICT 活用の授業は，「ロイロノート・スクール」などのアプリケーションソフトを使った授業が多い。その結果，効果的に学習の目的につながったり，これまで困難だったことが ICT の活用により簡単にできるようになったりすることが期待できる。

⑶　「変形」（Modification）

新たなテクノロジーを使うことによって，「教える・学ぶ」関係が変容する段階である。活用の主体が「教師」から「学習者」となる。
（例） ・　個人の学習のログを蓄積していく。 ・　Zoom[2]等を使って遠隔授業を受ける。 ・　共有したデータに学習者全員で書き込みをして，話し合う。

■ 資料を用いた文章の効果を考え，それを生かして書こう
「固有種が教えてくれること/グラフや表を用いて書こう」（５年）



作成した提案書を大型ディスプレイに表示して，学級全体に発表するようにした。その際，説得力が増すように参考資料等も貼り付け，参照できるようにしていた。

田代教諭（宇宿小）の実践

■ 中心となる語や文を見付けて要約し，調べたことを書こう「世界にほこる和紙/伝統工芸のよさを伝えよう」（４年）

付箋を貼り付ける機能を使って，友達が書いた意見文がこれまで学習した要件を満たしているか互いに確認していた。視点ごとに色分けしていたので，複数の意見文同士を比較しやすいようだった。

宮下教諭（宮川小）の実践

この段階での ICT 活用の授業は，新しいテクノロジーを用いることで，これまで不可能であった学び方が実現できる段階であると言える。つまり，ロイロノート・スクール等のアプリケーションソフトを用いなければできない学習がなされることとなる。

また，新しいテクノロジーを用いることで，学習の主体が「教師」から「学習者」に変容する段階である。つまり，学習の目的に迫るために教師がさせる ICT 活用ではなく，学習者が活用を選択・決定する段階である。

⑷　「再定義」（Redefinition）

新たなテクノロジーを使うことによって，学びの可能性が広がり，学びの在り方さえも変容する段階である。活用の主体が完全に「学習者」であり，学習者が自らの学びのために活用することが目的となる。
（例） ・　完全に子供一人一人の能力やニーズに応じた学びができる状態。 ・　子供が学びたいときに学ぶことができる状態。 ・　「授業」，「学校」というシステム以外の学ぶための選択肢がある状態。

2) Zoom（ズーム）とは，Zoom ビデオコミュニケーションズが提供するクラウドコンピューティングを使用した Web 会議サービスである。

資料２は宮下教諭（宮川小）の授業の一コマである。写真左側の子供が文章作成アプリケーションの漢字変換機能を使って，友達に正しい漢字を示して伝えている様子である。このように，教師がその方法を教えなくても，子供たちは自分たちで創意工夫していく。まさに，子供にとっての文房具的な ICT 活用である。

資料２ 子供の ICT 活用

また，資料３はタブレット型端末を介して互いに交流している様子である。ICT を用いた授業では，対面での交流が減るのではないかという懸念があるが，子供たちにとっては逆に話す材料が増え交流が活性化した例である。

資料３ ICT を活用した交流

子供の予想外の ICT 活用に対して厳しい禁止や制限で応えれば，ICT を文房具のように扱う機会は失われてしまい，子供による主体的な ICT 活用が困難になる。つまり，私たち教師は「学び」や「授業」の固定概念に縛られず，授業観や教育観をも「再定義」していく必要があると言っても過言ではない。

４　おわりに

今後私たちが国語科授業における ICT 活用を進めていくには，まずは教師が活用することが大事である。様々な実践を踏まえて説明してきたが，「S（代替）」段階から「A（拡大）」段階に至るところが急坂課題であり，ここを克服すれば学習者が文房具として活用できるような主体的な ICT 活用になると言われている。そのため，ICT の利用場面や時間，用途などを増やす必要がある。一人一台端末にインストールされているロイロノート・スクール等のアプリケーションを使った授業をまずは試してみることをお薦めしたい。

また，「A(拡大)」段階に至る過程で多くの課題が噴出するので，この時点での対処次第で安定期に入るか否かが決まるという。そのため，個人ではなく組織で ICT 活用を推進することが望ましいと考える。資料４は，ICT を活用した職員研修を実施することで，職員の ICT に触れる場を確保し，組織全体の熟練を図ろうとしている例である。

資料４ 清水小の校内研修の様子

さらに，先述したが，ICT 活用の大前提として常に念頭に置かなければならないのは，ICT は国語科の目標，いわゆる「目的」を達成させるための「手段」の一つであり，鉛筆や黒板と同じような道具の一種であるということである。国語科の目標によりよく迫るために最適であればどんどん使うべきだが，無理矢理使うのは本末転倒と言える。そのためには，私たち教師は授業構想や教材研究に取り組み，授業でどのような力を子供に身に付けさせ，そのためにどのような方法が最適なのかについて熟考しなければならない。まずは ICT を積極的に授業に取り入れ，教科の目標によりよく迫るものを残していくといった考え方が有効である。

子供が自分で考え，自ら学ぶ主体的な国語科授業の実現ために，ICT を効果的に活用していってほしい。

－主な参考・引用文献－

○　三井一希　著「SAMR モデルを用いた初等教育における ICT 活用実践の分類」2014，日本教育工学会研究報告集

○　坂本旬・芳賀高洋・豊福晋平・今度珠美・林一真　著　「デジタル・シティズンシップ」2020，大月書店

○　野間潤　著「学びの質を高める！ICT で変わる国語授業－基礎スキル＆活用ガイドブック－」2021，明治図書

（教科教育研修課　　石川　雅仁）